第５回　講　義

「『私』から始まるまちづくり」

ＮＰＯ法人岡崎まち育てセンター・りた　事務局次長　三矢　勝司　氏

１　まちづくりの事例紹介

○　高校生による祭り再興　伝統行事（祭り）と学園祭との出会い

伝統行事「花の塔」は農作物の豊作を願う祭り。しかし、宅地化が進み、農家の減少とともに、祭りが衰退。その現状に危機感を抱いた商工会（お祭りの事務局を担当）が地元の岡崎城西高校に相談をもちかけ、高校生らを中心として住民と一体となった取組により「花の塔」を再興した。

(1) 高校生の自分たちに何ができるのか

生徒会役員を中心に自分たちにできることを考え、さながら「まちなか学園祭」のようにして、サークル活動を花の塔の中心にステージを組んで披露することとした。また、鉄道研究会の鉄道模型展示や福祉サークルによる体験としての目隠し迷路などを実施した。

(2) 高校生と地域住民のコラボ

高校生が学校の中で行っていることを街で実施することが街全体の活気へとつながり、それに影響を受けた小中学生・保護者・地域住民も祭りに参加するなど成功を収めた。

○　公園をみんなの庭へ　はるさき地区の三つの公園（岡崎市）

現在の行政では、公園について「管理」から「活用」へ施策が変化している。岡崎市では、既に250もの公園があり、新規で作ることを一部中止している現状である。岡崎市のはるさき地区には、区画整理により新しく団地ができた。それに伴い三つの公園も作られた。そこで、住民たちは話合いによりそれぞれの公園に特色を出すこととした。

(1) 丘公園

丘公園には、森林がある。森林は放置しておくと荒れてしまうため、そこで、緑の専門家を招き、「フォレストキーパー養成講座」として勉強会を開催し、正しい枝の切り方、里山クッキングを学び合った。また、モリモリクラブによる森の手入れ（竹の手入れ）を無理のない程度に継続して開催している。

(2) さくら公園

路地で個々に花火を楽しんでいた住民たちが、皆で集まり公園で花火をすることとなった。それに端を発し、現在では、「親子で花火の会」を開催するようになり84世帯240人もの参加者があるほど大きなイベントに成長した。また、市では、業者により年２回草刈りがなされるが、それだけでは公園の環境はとても維持ができない。そのため、春咲３公園愛護運営会は、公園の利用者（グラウンドゴルフの仲間）を募り、使うためにまずは、草刈りをしてもらうことを始めた。正に、公園を利用し楽しむことと、公園の維持管理が融合した取組である。

○　子供たちが自ら考え自ら行動する体験学習の場としてのまちづくり　なごみん横丁（岡崎市）

今年で12年目となる「なごみん横丁」は「こどものまち」として、子供たちによって運営される４日間で、1,600人を超える人が来場するイベントである。飽くまでも大人はサポート役にすぎない。モデルは、ドイツの「ミニミュンヘン」である。住民登録を終えた子供には、労働の記録や預金通帳の機能をもったパスポートが発行される。住民票も発行され、通貨の発行、就労による給料の支給、選挙による議員や丁長選び、公共事業運営を目的とした納税等、一つのまちを子供たちが

運営する。まちを見学したい大人を案内する「観光ガイド」等、新しい職業も生まれ、起業家精神についての学びもなされている。１日 300 人の子供や 40 人ほどの大人のボランティアも来てくれている。子供たちがルールを作り、それを守ることで運営をしている。「遊ぶこと」・「働くこと」・「学ぶこと」が一緒になった取組である。

≪エピソード１≫

ある子供から「明日は来られない」と申出があった。「学校じゃないので、勝手にサボっていいよ。」と伝えたが、このような律儀な子こそ翌日来る、ということがよくある。その彼は「自分がいないと、お店が回らない。みんなが困るので来ました」と言ってやってきた。自分の役割分担意識と責任感が芽生えている。

≪エピソード２≫

なごみん横丁を経験した女子小学生の家庭での話である。母親が寝坊をしてしまった朝、台所から包丁の音が聞こえた。母親は、姑（しゅうとめ）が料理をしているのかと思って台所へ行くと、娘が料理をしており、その姿に驚いた。「なごみん横丁」で身に付けた、自分でやれることは自分でやろうという気持ちが、少女を動かしたのである。

≪エピソード３≫

なごみん横丁で、仕事をする楽しさを経験したため、地域の夏祭りで「仕事をください」と積極的に名乗り出る子供も現れている。

○ 地域住民の居場所としての空き家活用　池上台（いけがみだい）ハウス（名古屋市緑区）

緑区でプレーパーク活動を実践していた山田さんは、自身の所有する空き家を自治会や地域の方に貸し出していたが、老朽化に伴い、地域のために使える場として建て替えを実施した。ここでは、地域包括ケアの要素である「運動・栄養・社会参加」全てがそろった活動が実践され、また、人が出会い、つながる場として活用されている。

○ 空き家を活用した超高齢地区の再生　松本町の空き家対策（岡崎市）

松本町は、戦後は栄えた町だったが、数年前には店舗は数えるほどになり、松應寺（しょうおうじ）境内に形成された商店街は、31 軒中 14 軒が空き家となってしまった。正に「空き家」と「高齢化」の二つの問題を抱える地域だった。イベント開催のために１日限定で貸してもらえることに成功し、現在では年２回のイベント「にぎわい市」を開催している。

(1) 日常的な拠点施設の開設

オーナーから空き家を借り受けて改修し、軽食が提供できる厨房（ちゅうぼう）と手作り雑貨を販売できるレンタルボックス（１区画：1,000 円/月）24 区画からなる「なかみせ亭」を開設。同店は自分の得意なことを発揮したい担い手の受皿となり、空き家が利用可能な資源になり得ることを示すことができた。

(2) 独居老人との関わり

高齢化率が高い地域であるため、独居老人対策として弁当屋を開設した。また、年４回の会食会も実施している。このように高齢者と関わりをもつことで、地域住民が高齢者の健康状態や認知症の症状等を把握することにつながった。

２　おわりに

「私」にとっての「日常」は、「誰か」にとっての「非日常」であるが、それらをうまく組み合わ

せることで「まち」は面白くなる。今後のまちづくりで大事にしたいのは「異日常（自分とは異なる日常を楽しむ姿勢)」である。市民一人一人の「こんなことをしたい」、「こんな場所があったらいい」という思いを、市民が自ら一つ一つ形にしていく行動が、自らの暮らしを楽しくする。一人一人の暮らしを楽しくすることが、まちに集積すると、まちが豊かになっていく。